

1 中央公園

中央公園は高松の市街地の中心部に位置し、県庁、市役所、高校、商店街が集積する政治・文化・商業の中心地にある、本市を代表する都市公園です。戦災前の高松市街には、大名庭園の栗林公園以外の都市公園は皆無だったことから、市民の間から公園開設の要望が強く出されました。中央公園の場所は、昭和二十一年に都市公園用地として復興土地区画整理事業により確保しましたが、二十二年から五十七年の間は市立中央球場として利用されてきました。また、市立図書館も二十五年から約十七年間、中央公園の敷地内にありました。

しかし、五十七年に野球場が生島町に移転されたことに伴い、五十七年から六十年にかけて本来の公園として整備されました。

この公園は、市民参加による「緑にあふれ、季節感があり、気軽に楽しめる公園」を基本に整備を進め、外周を樹林でかこみ、中央部に芝生広場（自由広場）を配した公園として現在に至っています。



2 高松市民のねがい

「高松市民のねがい」は、高松市の市制施行九十周年という節目の年をきっかけに、市民総ぐるみでまちづくりを進め、「豊かで明るく住みよい高松」を築きあげようとの趣旨から、そのまちづくり運動のよりどころとなる合言葉として、昭和五十五（一九八〇）年九月二十五日に制定されました。

緑明るい栗林公園 瀬戸のさざ波呼ぶ屋島

わたくしたちは 美しい自然と歴史にはぐくまれ

あすに伸びゆく高松市の市民です

四国の中心高松市を いっそう明るく住みよいまちにすることは
わたくしたちみんなのねがいです

そのために わたくしたちは 誓って次のことにつとめます

- 一 自然を愛し 清潔で美しいまちづくり
- 一 人の立場を大切に 迷惑をかけないまちづくり
- 一 家庭を明るく 青少年をのばすまちづくり
- 一 健康なからだと 心にうるおいのあるまちづくり
- 一 働く汗を尊び 力をあわせ 平和で豊かなまちづくり

3 平和の群像「あけぼの」

この作品は、市が市制施行九十周年を記念して、東京芸術大学名誉教授の菊池一雄に依頼して制作されました。高松空襲で犠牲となった多くの市民の霊をなぐさめるとともに、永遠の平和を希求し、あすの高松を築くシンボルと位置付けられた「平和の群像」は、昭和五十八年に完成し、除幕式が行われました。

高さ二・四メートルの、手をつなぐ三人の女性の群像で、向かって右側の女性は左手にみかんを、左側の女性は右手にオリーブを持ち、平和で明るい豊かな高松を象徴しています。製作費六千万円のうち、三千八百万円は市民の募金でまかなわれ、像の名前も市民の投票で「あけぼの」と名付けられました。

高松市役所玄関前の「市民のねがい」台座の上にミニチュア版が、高松第一高等学校には、遺族から寄贈されたこの像の原型があります。



4 ハゲさん

「ハゲさん」は、幸せをもたらすタヌキとして、平成五年（一九九三）に四番丁地区地域おこし事業推進委員会により製作されました。

中央公園は、かつて浄願寺の跡地であり、浄願寺では殺生を禁じていたため、境内には大木が生い茂り、タヌキが住むのに適していました。そこへ一匹のタヌキが住みつきました。年末になり、貧しくてお正月を迎えられないと話す老夫婦の会話を耳にしたとき、無性に気の毒になり、後先考えずに金の茶釜に化けて金持ちに売られて行くことで老夫婦を助けました。

しかし、毎日火にかけられたり、磨かれたりするので、このタヌキの頭がつるつるに禿げ上がり、痛い痛いと言っていました。そこへ、住職がお供えの鏡餅を三つあげるとようやく泣きやんだと言われています。「今泣いたんだれかいの 浄願寺の禿狸 おかざり三つで だあまった」と、童歌も残っています。



5 伸

苦難を乗り越えて伸びゆく高松をテーマに、一九八九年四月に設置されました。作者は、三枝惣太郎。

●三枝惣太郎

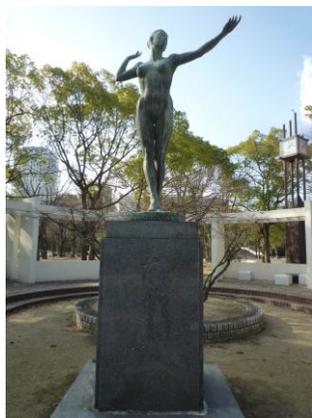
香川県出身。昭和十年（一九三五）、東京美術学校（現東京芸術大学）を卒業。「全国陶磁器展」東京都知事賞、「香川県庵治町石材見本市」通産大臣賞などを受賞。

6 大気

緑の中で手を差し伸べ、一步を踏み出す少女の像。昭和六十二年（一九八七）十一月設置。作者は池川直。すなお

●池川直

昭和三十三年、高松市に生まれる。筑波大学大学院を修了し。香川県展知事賞、日展特選、よんでん芸術文化奨励賞などを受賞。



7 水原茂と三原脩

かつての中央公園は球場であり、野球王国香川ではこの球場を舞台に数々のドラマが演じられ、球界を代表する名選手を生み出しました。現在、かつてのホームベース跡に埋め込まれた石塁と、二人の偉大な選手の像がこれを象徴しています。

銅像は、水原茂の母校である旧制高松商業学校（現香川県立高松商業高等学校）と、三原茂の母校である旧制高松中学校（現香川県立高松高等学校）の野球部OBや、県内財界人らが発足人となり、平成五年（一九九三年）に建立されました。

除幕式では、三原の女婿中西太が「銅像が子どもたちの励みになり、野球王国復活のシンボルになってほしい」と語っています。（作者は渡邊庄三郎）

★水原 茂（一九〇九年～一九八二年）

高松市出身。旧制高松商業学校（現香川県立高松商業高等学校）時代は、投手・三塁手として甲子園に出場し名をはせる。



↑現在も自由広場に残るホームベース



甲子園では、大正十四年（一九二五）夏と昭和二年（一九二七）夏の二回、全国優勝を達成した。現役時代は巨人で活躍し、引退後は巨人、東映、中日の監督を歴任した。巨人監督時代の在任十一年間で八度のリーグ優勝、四度の日本一に輝き、セントラル・パシフィック両リーグでチームを日本一に導いた。

★三原 脩（一九一一年～一九八四年）

まんのう町出身。旧制高松中学校（現香川県立高松高等学校）時代は、遊撃手で甲子園に出場、早稲田大学に進み二塁手として活躍した。現役時代は巨人で活躍し、引退後は、巨人、大洋、西鉄、近鉄、ヤクルトの各球団監督を歴任し、監督としては、勝負勘に優れ、周囲の予想を超える戦術は「三原魔術」と呼ばれるほどで、数々の名勝負を演出し、名声を博した。

8 菊池寛立像

像の作者は、写実性の高い、やわらかな表情の人物像を得意とした新田藤太郎です。

「菊池寛の功績を後世に」と、昭和三十年（一九五五）



に菊池寛顕彰会が発足し、翌年に銅像が完成しました。

当初は胸像の予定でしたが、それではあまりに貧弱だという市長（国東照太）の一言で立像に変更されました。また、菊池寛の服装を和服と洋服のどちらにするかで議論され、多数決で洋服に決まりました。この像の菊池寛が眼鏡をかけていないのは、子どものいたずらで破損するのを防ぐためと言われています。

★菊池 寛（一八八八年～一九四八年）

菊池寛は、明治二十一年（一八八八）高松市に生まれ、「父帰る」「真珠夫人」など多くの作品を残した作家である。また、ヒューマニズム、リアリズムの作家として多くの読者を持ち、後世の作家たちにも多大な影響を与えた。一方、作家活動以外でも文藝春秋社の設立、「芥川賞・直木賞」「菊池寛賞」の創設、著作権の擁護、作家の地位向上など、数々の功績がある。

9 国東照太翁立像

昭和二十一年（一九四六）から昭和四十二年（一九六七）まで高松市長を務めた国東照太の像。近代都市高松の基盤を作り、名誉市民第一号となりました。



10 源泉

山田正治による黒御影石製のモニュメント。平成元年（一九八九）六月に設置されました。



11 『父帰る』像

平成七年（一九九五）二月十三日、〈菊池寛通り〉を印象付ける目的で、特に市民に親しまれている『父帰る』の一場面を表したブルンズ像が設置されました。制作者は、高松市出身の池川直（「6 大気」の作者）。

■場面

明治四十年（一九〇七）頃、南海道の海岸にある小都会。長男賢一郎、その弟新次郎、妹おたね、そして母のおたか、家族揃っての和やかな夕飯のひとときに、突然、二十年前に不義理な借金を残して家出した父宗太郎が帰ってくる。



母 まあ、お前さん、何から話してええか。子供もこんなに大きゆうなつてな、何より結構やと思ふとんや。

父 親はなくとも子は育つと云うが、よう云うてあるな、ははははは。

(併し誰もその笑いに合せようとするものはない。賢一郎は卓に倚つたまま、下を向いて黙して居る)

母 お前さん、賢も新もよう出来た子でな。賢はな、二十の年に普通文官云うものが受かるし、新は中学校へ行つとつた時に三番と降つたことがないんや。今では二人で六十円も取つて呉れるしおたねはおたねで、こんな器量よしやけに、ええ処から口がかかるしな。

父 そら何より結構なことや。俺も、四、五年前迄は、人の二、三十人も連れて、ずーと巡業して回つとつたんやけどもな。呉で見世物小屋が丸焼になつた為に、エライ損害を受けてな。それからは何をしても思わしくないわ。その内に老先おいさきが短くなつてくる、女房子のいる所が恋しゆうなつてウカウカと帰つて来たんや。老先の長い事もない者やけに皆よう頼むぜ。(賢一郎を注視して) さあ賢一郎! その杯を一つさして呉れんか、お父さんも近頃はええ酒も飲めんでのう。うん、お前だけは顔に見おぼえがあるわ。

(賢一郎応ぜず)

母 さあ、賢や、お父さんが、ああ仰しゃるんやけに。さあ、久し振りに親子が逢うんじやけに祝うてな。

(賢一郎忘れず)

父 じゃ、新二郎、お前一つ、杯を呉れえ。

新二郎 はあ。(杯を取り上げて父にささんとす)

賢一郎 (決然として) 止めとけ。さすわけはない。

母 何を云うんや、賢は。

(父親、烈しい目にて賢一郎を睨んでいる。新二郎もおたねも下を向いて黙っている)

賢一郎 (昂然と) 僕たちに父親があるわけではない。そんなものがあるもんか。

父 (激しき憤怒を抑えながら) 何やと!

賢一郎 (やや冷やかに) 俺たちに父親があれば、八歳の年に築港からおたあさんに手を引かれて身投げをせいで済んだ。あの時おたあさんが誤って水の浅い処へ飛び込んだればこそ、助かって居るんや。俺達に父親があれば、十年から給仕をせいで済んだ。俺達には父親がないために、子供の時に何の楽しみもなしに暮してきたんや。新二郎、お前は小学校の時に墨や紙を買えないで泣いて居たのを忘れたのか。教科書さえ満足に買えないで、写本を持って行って友達にからかわれて泣いたのを忘れたのか。俺たちに父親があるもんか、あればあんな苦労はしとりやせん。

(おたか、おたね泣いている。新二郎涙ぐんでいる。老いたる父も怒りから悲しみに移りかけている)

菊池寛『父帰る』より

12

棕園先生遺愛の碑

りょうえん

棕園は、本名を赤松 渡といい、赤松家は、代々医術をもつて高松藩に仕えていました。幼い時から勉強を好み、片山沖道に学びました。棕園は、香川県、徳島県の会計検査院に奉職、明治二十三年（一八九〇）、初代高松市長に任命されました。常に市民の暮らしを心配し、産業の振興、福祉の充実に努めた人物として知られています。

13

玉楮象谷坐像

たまかじぞうこく

玉楮象谷は、高松市磨屋町に生まれました。三代の高松藩主に仕え、香川漆芸における「蒟醬（きんま）」「存清（ぞんせい）」「彫漆（ちようしつ）」の技法を確立しました。これらの技法は、伝統工芸として現在に受け継がれています。

像の作者は、菊池寛立像を手掛けた新田藤太郎です。



14 サヌキ

昭和六十一年（一九八六）に東京で開いた個展のために速水史朗（多度津町出身）が制作した作品です。通称「讃岐富士」と呼ばれる飯野山を思い描きながら作りました。「おだやかで心温まる美しいフォルムをしたこの山が、香川県の風土や人の心を如実に物語っている」として取り上げました。

個展には、黒花崗岩で制作された十一点が出品されましたが、個展から帰っていた五点を当時の市長の脇信男が目にし、「讃岐の風景そのもの」と惚れ込んだことから、昭和六十三年に中央公園に設置されました。後の二点は、速水の進言により追加されました。



15 女の子二人

昭和六十三年（一九八八）に、瀬戸大橋開通記念に阿部誠一（愛媛県出身）が招待出品したものです。自宅近くで遊んでいた小学四年生と二年生の少女がモデルです。像と像の間に庵治石のベンチを置いて、瀬戸大橋を連想させました。

平成元年（一九八九）に、高松屋島ライオンズクラブが買い取り、市へ寄贈しました。



16 イサム・ノグチ遊具彫刻

二十世紀を代表する彫刻家であるイサム・ノグチは、一九六九年（昭和四十四年）、牟礼町にアトリエと住居を構え、香川県にもゆかりの深い人物です。イサム・ノグチは、日常生活の中にアートを持ち込むエレメントとして遊具をとらえ、自然や古代文明にある形を抽象化し、世界の子どもたちへ宇宙への夢を託しました。中央公園には、「オクテトラ」「プレイスカルプチュア」「シーソー」が設置されています。



17 パカツ・ポコツ・ストーン（裸の王様）

製作者の寺田武弘は、岡山を中心に、大分・兵庫・山口などで次々とユニークなパブリックアートを発表しています。この作品は、巨大な花崗岩をくり抜き、八個に分割・構成した大作で、重い石材を使っているが、なぜか不思議と重量感を感じさせない作品構成によって積み木遊びのブロックを連想させるものです。



18 菊池寛文学碑

新次郎

おたあさん

今日浄願寺の

棕の木で百舌が

鳴いとりましたよ

もう秋じゃ

菊池寛・父帰る より





この庵治の自然石に刻まれた碑文は、菊池寛『父帰る』の一節で、兄の賢一郎、弟の新次郎、母のおたかでの夕食中、新次郎が母に話しかけた言葉です。
昭和五十五年（一九八〇）、菊池寛の生誕日（十二月二十六日）に菊池寛を顕彰して高松市が建立したものです。

19 菊池寛生家跡碑

菊池寛は、明治二十一年（一八八八年）、香川郡高松七番丁六番戸の一（高松市天神前四）に生まれ、明治四十四年に上京するまでこの辺りに住んでいました。石碑の「菊池寛 生家跡」は、友人の作家、小島政二郎の筆によるものです。また、自筆されている「不実心不成事 不虚心不知事」は、菊池寛の座右の銘です。最近まで、道路（菊池寛通り）をはさんだ反対側にありました。が、平成二十七年に現在地へ移しました。

20 水邊

この作品は、昭和五十六年（一九八一）の高松市水道局庁舎落成に際し、設置されたものです。作者は、高松市出身の萬木準一（まんきじゅんいち）。



21 小河健三郎翁壽像

かつての市立中央球場は、昭和二十二年（一九四七）に故小河健三郎翁をはじめ、野球を愛する多くの市民の熱意と献身により建設され、三十年あまりの間、市民の心に潤いと活力を与えました。この像は、中央球場に飾られていたもので、中央公園の整備に伴い、この場所に移りました。



22 中河与一文学碑

中河与一は、坂出市出身の作家で、横光利一、川端康成と共に、新感覚派として活躍しました。代表作は『天の夕顔』『失楽の庭』『探美の夜』『古都幻想』など。碑文には、「自由なる人永遠に海を愛さむ（ボード・レール）」の詩句が刻まれています。



23 AMAGOI, JISHI

昭和三十七年（一九六二年）に流政之により製作されました。

流政之は、ニューヨーク世界貿易センターのシンボルとして

『雲の砦』を制作するなど、世界的に活躍されている彫刻家、

作庭家です。



《参考文献》

- 田中茂 『アートな散歩道―香川の野外彫刻53選―』 二〇〇八年
- 四国新聞社 『香川県人物・人名事典』 昭和六十年
- 高松市 『高松百年史 下巻』 平成元年
- 高松市 『中央公園パンフレット』
- 高松市 『広報たかまつ 10月15日号』 平成十七年
- 高松市文化財保護協会 『わが町の文化財探訪』 平成十九年